光

第五十五輯

大正十五年七月

◆南満の一燈……西田天香

◆天香師への巡禮……I K生

◆家郷一日の遊歩……松下吉衛

同人　懺悔報恩の奉仕者

祈願　不二の光明によれる生活

費用　供養されたる淨財

◆人間といふもの……八田かつ三

◆石原等さんの御霊え……すゞき五ろう

◆武蔵野道場より……山口源吾

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の擧示し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて　燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

南満の一燈

西田天香

六月五日香港丸にて大連に上陸した。昨年秋此地を去つて半年目である。

昨秋から十二月三十日にかけての滿鮮托鉢を、歸りがけ玄海灘で總〆すると、『此まゝでは日本は危い』といふ結論になつた。當時求めらるゝまゝに大連に數名の同人を殘しておいた。其人等は重もに大連の各有緣の家に托鉢されて居ますが、段々に緣が熟すると色々のことを賴まれる。それらの事の相談を受ける爲めにきたのである。

香港丸はなじみの船。殊に事務長は京都の伏見に居る方で、聞けば『托鉢を賴んだ事もある』と云はれたので、妙だなあと思ふた。不相變三等室。此度は私の外に同行四人。室は便利な處で取分け海上が穩かで仕合せであつた。

船へ入ると私は氣が延んびりする。陸上では心が忙しい爲めであらう。一燈園としては非常に多事な時、何もして居ないやうで頭のうちに澤山な懸案がつまれてある。同人夫々の人の結婚問題、園の淸規の必要、宣光社とは何ぞやに對する具體的創造、園生活と敎養問題、社會事業との觸れ工合、おひかりに卽しながらの個性の整理、現在の事業に賴まれた時の垂手の程度、文化乃至科學との接觸工合等より一燈園の建物の立退きなどの事に至るまで、悉く頭をつかわせられるのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『おひかり任せ』であるものゝ、おひかりのさしずによつて奉仕せねばならぬから忙しい。もう此頃は隨分それ〴〵同人の方に任せきつて、一寸見ると用事がない樣に見える。手紙の始末も大方はしてもらふが、こんなことで頭をつかふ。それが船に乘ると一寸氣が變つてゆつたりする。

門司でも光友におたよりもせいで通りぬけ樣としたが、どこから知れたか、柳原さんが訪ねてくれた。是も中々大切な問題についての相談であつた。古い光友はとても有がたい味がする。又一度互ひにおひかりのひらめきを知りあつたものは、結句同じ處へ落付くといふことがよく知れる。私の思ふてゐること、柳原さんが思ふてゐる事とは一つである。色々の道程をまわつてきても落付く舞臺は一つである。柱をさがし、梁を求める、つまり建てたいものは同じ形の家である。柳原さんは云ふ『おひかりに卽する女子敎育の爲めに此身をさゝげて見たい』と。これは非常に私等も求めてゐるのである。三四時間も語りあつたが出帆の時がきた。彼の人は福岡へ香港丸は大連へと、手を分つたのは一時頃であつた。

始めて海で「イルカ」の群を見た。勇ましいものである。一間程の大きさだが、船の兩方に近く又遠く、丁度同じ方向に走るのである。其速さ敏さ、神樣とは實に不思議な仕事をなさるものだと思はせる。船中に福山師範學校の生徒さん連と鹿兒島の工業學校?の生徒さんの見學團が乘つて居られた。大連へ着する間際に見付られて講演をたのまれた。船中の講演は始めてゞあつた。引率される先生は紀州田邊で私の話しをきいた人。非常に喜んで呉れられた。

『學生方の滿洲見學について一つの願がある。それは滿鮮人を眞の兄弟と思ふて愛して通つてもらひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

たい事と。その人等は案外純な魂を持つてゐられて、表面の身裝に似合わぬよい働きをしてゐられる。若しそれを輕卒に殊に少しでも侮蔑して通るやうな事でもあれば、國家の爲めに通つて貰はぬ方がよい。それは反感と怨恨を殘してゆくのは非常な人類全體の損害であるからである。互に合掌しあふ心持ちで見學して貰ふならば、諸君は立派な小さい外務大臣である。臺灣できいた話しがある。二人の日本人が話しながら散歩した。あとから臺灣の小學生らしい子が五六人ついてきた、勿論何氣なしについてきた。臺灣神社の前で日本人は帽子をとつて丁寧に禮をした。すると小供がさゝやいたそうな「あれは先生にちがいない」と。そんなことを少しも知らぬ二人の日本人は、こんどは道端で立小便をした。すると小供は又さゝやいた「あれは先生ではなかつたね」と。作り話しでもなさそうな。純な小供はそれほどに敏く見る。學生諸君が心の底から敬虔で言葉や態度をやさしくして、滿洲の人に觸れていつてもらひたい。これが私の願ひである。』

と頼んでおいた。

大連では同人光友に出迎へられて、其日から色々のことに托鉢した。

何處も不景氣は同じことである。又心の落付の少ないのも變りはない。もうこんな言葉はありふれ過ぎてゐる位である。少しは慢性的になつて、苦痛を苦痛と思はぬかも知れぬ。借金も始め拂へぬときこそつらけれ、次第々々に免疫的に斷り云ふのが何ともなくなるといふ人もある。そうかも知れぬ。けれどもそれはどこへも流れて消へてゆくのでない。借金なら利子がふへる。怨恨なら深まり重さなつてゆく。何時か破裂する時がくる。昨夜は職業紹介所に頼まれて講演をした。幹事の人の話に

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

よれば、

『此地は苦力(クリー)(滿洲人の勞働者)が下級な働きをする。所謂失業者といふても內地の自由勞働者ではない。矢張一寸した家に居る人もある。合宿する人もある。中には隨分妻子をつれてゐる人の群れもある。まさか苦力と同じ樣には働きも出來ず困りぬいてゐる。』

『困りぬいても食べてゆくのは』

『無理してゆくのです。』

『無理になつても食つてゆけるのは。』

『あちらこちらで借り倒すのです。』

『倒されながらかす家のあるのは。』

『次ぎから次へと新らしく借り倒すのでしよう。』

成程それなら無理になる。人の心もすさみゆこう。

『そんな方が幾人さん位あるでしよう。』

『二三千人はある筈です。』

是なら中々問題である。一寸見れば立派な樣でも、何處にも深刻な問題はある。高利貸といへば耳ざわりもよくないが、銀行と質屋との外の金融業者の貸高が、大連丈で三千四百萬圓とは驚かざるを得ぬ。隨分ひどいのがあるそうな。一生涯の月給を書き入れた人もあるとも聞いた。年に二割五分にしても八百五十萬圓は、鞭でしばかれる樣な目に遭ふて、生活上に逐はれてゐる。口數が二萬口で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

丁度二十萬人の大連の一割に當ることになる。

こんな問題は一燈園生活でなくては整理が出來ぬは明かである。生活を根から變へる事でなくて、どうして是がほどけよふ。欝陶敷い氣分で逐はれてゆくより、一度生活上の洗禮を受けて生れ子になつて建てかへるがよいのである。至る處に問題はうづ高く積まれてある。どうする事も出來ないで、其日暮しに押してゐる。

一人の實業家が紹介者たる一人の光友と共に訪ねて來られた。もとは宗敎に深い關係のあつた方であるが、大方生ぬるい宗敎家たるに甘んじないで、潑溂たる經濟界に其雄圖を試みようとされたのであらう。立派に一時成功されたのが、矢張先年來の不況の爲めに、餘程行詰られたものらしい。こうした事はざらにあるのである。

立派な建物である。飛拔けた立派なものである。東洋第一だと云はれてゐるが、全くそうらしい。先年臺灣にいつた時、臺北病院に話しに行つた。後藤新平さん時代に出來たもので、それは壯大なものである。此時東洋第一と聞いた。併しそれよりもまた大きい。内部の事は門外漢では分らぬが、見た眼には餘程大きい。素人は金のかゝり高で目安をつけるが、臺北病院の二三倍も金がかゝつて、六百萬圓以上とも聞かされた。兎に角すばらしいものである。院長さんが私しの古い友人の學友であつたことゝ、此病院の部長さん連が、多くは京都大學のお出である爲めに、私は非常に心易くしてもらふ。

院長さんに今年も講話を賴まれて、ある日の午後にする其朝、お宅を訪問して賴んだことがある。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

それは『講話をするなら托鉢もさせて下さい』といふ事であつた。院長さんは喜んで承諾された。共に馬車に乘つて病院にゆき托鉢の方針と私の部屋とを極めてもらふた。善い部屋もあいてはある。けれども一燈園の事はよく理解のある先生であるから、私の要求をそのまゝ入れて、地下室の部屋を見付けにいつた。中々色々つまつてある。事務の方をつれられて、茲かあそこかと見てまわる內、一つの物置の亂雜になつてゐる所があつた。『丁度片付けるにもよし、茲をかりたい』といふたが『これはあまりにすまないから』とて、隣りの小ぢんまりした一室を明けて供へて呉れられた。表てには蓄電室とかいてある。地下室の守衛さんの室と向ひ同士である。三等患者のベッドを二つ貸してもらふ。病室の藥瓶を置く臺を二つ借る。椅子が二つに、來客の爲めの腰掛けが二つ、それに長いショウギが一つ、水溜、箒、雜巾、バケツと、掛りの方が備へて呉れられる。窓は三つある、引おろす窓掛けは新らしい。院長さんの『こんな處に先生に居てもらふてはすまない』といふ挨拶に對して、『この樣な立派な處においてもらふてはすみませぬ』と院長さんにお禮をいふて、そこが私の大連の帖半寮となつたのである。講演を午後にすませて、五階の食堂で部長さん方、事務の重役方と共に晩餐に招かれた。下には同人方も食事をすませて帖半寮にまつてゐる。

私『では皆樣失禮します。御馳走樣でした。有難う御座りました。』

院長『では今夜あそこにあなたがおとまり下さるのですか。』

私『とめていたゞきます。もう一人同人と一しよに。大方私は勝手のみさせてもらひましようが、一人だけは明日から托鉢をさせてもらひます。ありがたう、皆さん左樣なら。何分よろしく。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一同『さようなら。何分どうぞ。』

エレベーターで下に降りる。同人五六名たのしそうに話してゐる。程なくみなは名々の托鉢へかへる。私は一人の同人と帖半寮に宿る。洗濯したての敷布團に、同じカバーに二枚の毛布の新らしきが包まれて載せてある。下はコンクリであるが、新建であるので誠に氣持がよい。勿體ない様な感じがする。

こんな因縁で病院の地下室にゐる。私には勿體ないが、新らしいお客様には、お茶を入れる準備がない。五階には食堂があつて、コーヒ紅茶も賣つてゐる。話はもとにかへる。

*　*　*　*　*

主『見晴しもよろしいから。』

客『それではお供いたしましよう。』

すぐ室を出で、ボタンを押せば、地下室迄エレベーターは降りてくる。五階は非常に心地のよい所。空氣療法室には籐椅子が澤山ならべてある。

光友『私と非常な親友で隨分長い交りです。私の新生涯に入つたのを喜んでゐてくれる一人で、先生にお話しをきゝたいとてきたのです。元は眞宗の寺に生れた方だけあつて、常に信仰の事を語りあつた事もあるのですが、經濟生活のゆきつまりに出あふと、何だか信仰がピツタリ役に立たないので。』

客『何だかシツクリしないのです。信仰の事はあらかた手に入つて居るとおもふのですが、眼の前に

往きつまると自在がなくなります。』

主人『お互ひにそうです。容易でないです。殊に經濟生活はうつかり自在を得てゐる樣におもふてゐるが、それが多くは知らず識らずに誤魔化してゐるのであるやうに思はれます。』

客『S君のとられた態度は一燈園生活でしようね。』

主『そうです。』

客『ほんとにはつきりしてゐます。S君のやうにやれば徹底もし、また氣樂でもあり、うらやましいとおもひますが、又必らずしもそうせないでもとも思はれまして。』

三つの籐椅子を鼎の足の樣にならべて、話しは段々にシンミリする。『うらやましいとおもひますが、又必らずしもそうせないでもとも思はれまして、』で、話しの途切れてしまふ處に、千萬無量の謎がつゝまれてある。大きく云へば人類全體のなやみの札の辻である。分別盛りの宗教家出の立派な紳士が、辛苦經營して、必らずしも私事でないとまで考へてやつて居た、對外商業が一朝逆境に陷つたとき、一燈園によつて救はれた友人の新生活に、大なる憧憬と尊敬とを拂ひながら、一面に消極的のやうにも見えるのは無理もない。又煩惱卽菩提といふからには、その逆境を其儘忍受して、無理にでも押してゆくのも積極的商道として許されるものゝ樣に考へらるゝも道理である。併しそこには儼然として『なやむ』といふ事實がある。此『なやみ』そのまゝ卽菩提であると云ふことは云ふ、又そうであるべきだと信じ?はする。けれども尙はつきりと『なやむ』といふ事實はある。時に胸もいたむ。息も整はぬ。飯の味ないこともある。『そんなものだ人生は』とか、『そのまゝそれが』といふて見た

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

とて、どこかに『まちがつてゐるぞよ』とさゝやかれる樣な氣もするものである。Sさんは同じ難境を一燈園生活で突破した飛躍した。そうして債權者にも感心されまた新生涯の托鉢先きでは、非常な信頼と感謝をうけて、その店と家庭には少からぬよいおひかりが傳はつた。それを見ると何だか經濟生活に正邪の二つの道があつて、Sはその正しきに進んだらしく思はれて、同じ種類の難境を從前通りに押してゆくのは邪道の樣にも考へられる。けれど又『必らずしも』と引戻す、强い何か執着―?―がある。もしもせねばならぬとなれば、『家庭は兎に角一度路頭に立たねばならぬ』などゝ云はれるのに一種の淡い恐怖を感じる。自分がやつても家族はびつくりするだらう。小供の敎育はどうなるか、國家の發展に妨げはないかなどゝ、それからそれへと複雜になつてくる。そこ迄せいでも、昔しから同じことを繰り返して、合奏的に進步してゐるのであるまいか。そうであるなら、必らずしもS君の樣にせねばならぬといふ事はなからう。苦しいなりに押してゆくのも又正しい道であるかもしれぬと落付きたくなる。無理もない事だ。けれど矢張そこにどうすることも出來ぬ事實はのこる。それは『矢張何だか落付かぬ』といふことである。

私は玆で一つSさんの新生涯になられた徑路を述べて見る。

昨年の十月の始めであつた。滿鐵沿線の講演をしてまわつて營口に着いた。たしか倶樂部で二時間あまり話しをして歸ろうとすると『是非宿をしたいからくる樣に』と、親切につれてゆかれた。それがこのSさんの家であつた。建物は大きな和洋折衷で、何だか少しがらんとした樣でもあつたが、同行の二人もともにとうど泊めてもらふたのである。有志の方十數名に座談をなした後、色々打あけ話

しが始まつた。

S『私は實は今絶體絶命になつて居るのです。恥かしいことですが、どうかすつかりきいてもらいたいのです。』

香『どうぞおきかせ下さい。』

S『御承知か知りませぬが、私は特産商（滿洲特種産物大豆、豆粕等を扱ふ商業のこと）ですが、先年來の大不況の爲め損害をしまして、今ではきれいに無一物、おまけに相當の借金があるのです。一燈園の書物も讀んでゐて、蔭ながらあなたの新生涯へお入りになつた御様子も想像してゐますので、思ひ切つて捨て身になつて債權者にあやまつたのです。勿論すべてのものをなげ出しました。此家も實は私の家ではありませぬ。友人の親切でしかも無家賃でかして呉れて居りますのです。ここは今非常の不況の爲め、こんな大きな家も一寸借り人もないのです。番頭も二人居て呉れますが月給も渡さないのです。それは長年一しよに働いて呉れたもので、私の心もよく知つて呉れてます。一辛棒する間給料なんかは貰らわいでもよいと云ふてくれます。家内のものもすつかり賣り飛ばし、今ではあれは私の云ふ事も信用せぬ位になつて居ります。まあ恥しい事ながら、今夜おきせ申すふとんも自分の物ではない位なのであります。』

Sさんは一氣にこゝ迄いひ放した。少しばかりは亢奮の様子の見えたも無理ではない。ハンケチで顏を拭きながら、ホツト一休みされたのであつた。私をわざ〳〵呼んで泊められたわけも分つた。私はこの熱心が嬉しかつた。私は實際問題を以て突貫されるのが大すきである。唯研究のみするのはた

よりない。こうした眞劍な話しになると身がしまる。私の興味は非常なものである。息を殺して一心に聽いてゐる。

S『無一物だけならよろしいが。』

香『どの位ほど足りませぬ。』

S『ざつと十六七萬圓。』

香『個人の借りですか銀行の借りですか。』

S『何れもになつて居ります。』

香『その位綺麗に出してしまわれたら、債權者も惡い氣持はありますまい。』

S『よい氣持でもありますまいが、まあ大方はゆるしてくれて、待つて居てくれるのでしようが、玆に一つ困つた口があるのです。』

香『それはどうした口ですか。』

S『金高はあまり澤山ではありませぬが、一人だけ何といふても待つてくれませぬ。一人でも待つてくれねばどうする譯にもゆきませせぬ。早く捲土重來的に、何か始めなければならぬのですが、其一人の爲めに立往生をして居ります。此間ももう渡そうにも何もないからと申しますと、それでは番頭を貸さないかと申します。歸つて試みに話して見ますと、「冗談じやない御主人、誰れが債權者のうちへいつてはたらけますものか」と申します。』

香『なるほどそれは尤ですね。』

Sさんは極度にゆきつまつて居るらしい。こうした時の話しには、少しの無駄も體裁もない。顔から姿勢から言葉から、寸分の隙間もなく、云はゞ經濟的生活の斷末魔だけに、話しの一息々々が生命がけである。沈痛な聲で最後の一句を吐き出される。

S『こんな時に、一燈園ならどうなさるでしよう？』

香『さあ………』

S『これでも救はれますでしようか？。』

香『さあ………』

私は容易に口があけぬ。こうした瞬間は誠に大事な時であるから。「さあ……」といふたきり靜、かに深く禱つてゐる。Sさんは私に吸ひ込まれる樣に見つめながら、矢張無言で待つてゐる。

香『あなたはほんとにお仕合せです。』

S『それはどうしてゞす？。』

香『こゝまで正直に詮じつめなさつたことゝ、よい機會にあひかりにおすがりなさつたことがです。』

S『………』

香『もしもあなたが一燈園生活にはいつて、一度一切をお捨てなされば、屹度救はれなさいます。』

S『一燈園生活つて京都へゆかねばならぬのでしようか。』

香『いゝえ。決して。どこでもよいのです。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

S『でも、私は一切を捨てゝ居ります。』
香『まだ捨てゝいなさらぬ物がある。』
S『何をあなたにかくしましよう。私はもう何をも内證で持つては居りませぬ。』
香『私の眼の前にお捨てにならぬものがある。』
S『それは何ですか。どうかいふて下さい。』
尤である。誰がその一つに氣がつかう。云へば驚かれるに極まつてゐる。けれども今は思ひ切つて云はねばならぬ。靜かに
香『それはあなたのおからだです。』
Sさんはだまつてしまつた。
香『そのすてたからだを債權者の處へもつてゆくのです。番頭さんを雇へば給料がいる。無給であなたが托鉢なされば、先方は一段とよろこぶでしよう。』
Sさん愈々考へ込まれる。兩手を膝の上に組み合せ、てこでも動かぬやうな姿勢になつて、半ばうらめしそうな語調にて、
S『それでは妻子はどうなりますか。』
香『私はそんな贅澤な事を思ひたくない。至誠をもつてあやまるとき、自分の家族のことなどはあとまわしにします。』
S『…………』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

香『誠の發露するとき、その心に妻子も活きます。』

と、きつぱり云ふた。はなしはとぎれて、しばらく無言のさしむかひとなつた。Sさんは非常によい頭腦の持主である。齒切れのよい質である。何か深く決心されたかのやうであつたが、「お休みなさい」で、その夜はねた。

翌日の夜も講演があつた。債權者の方もきゝにきてくれられたらしい。私はおいとまをして營口を立去つたが、奉天あたりでSさんの手紙をもらふた。此手紙は實に有難い尊いもの丶一つであつた。何でも愈々新生活に飛び込まれて、その頃大連のある高等女學校で一燈園の同人が托鉢されてゐる處へ來て、若い人等と共に大きな講堂の床みがきを苦力のやうにはたらかれたらしいが、玄關の靴の泥落しの下を掃くとき、ボロ〳〵と涙がおちたそうである。それは勿論悲しみの涙でなふて、感激に滿ちたうれし涙である。その時の手紙のうちに強く私を喜ばせたのは、『こんな世界のある事を、今迄なんで知らなんだか。』と『これなら屹度神樣に許されます。』との二語であつた。新生涯に飛躍して托鉢をして始めて知つたおひかりの世界、やらない前に想像の出來なかつたことをよく云ひあらわしてある。

何でもあとから聞いて見ると、講演の翌日愈々決心して債權者のおうちへゆかれ、

S『私は渡すべき最後の一つをおしんでゐました。どうか私のからだを渡します。番頭のかわりにつかつて下さい。番頭なれば給料がいりますが、私しは托鉢しますから手當の心配をしてもらわいでもよい。』

債權者の人は、出し拔けの此挨拶に一時びつくりされた樣だが、一燈園のはなしをも聞かれたこと

のある爲めに、少しは見當がつかぬでもないものゝ、しばしは言葉も出なかつた。やがて

債權者『一燈園の托鉢、それもよいが、君は妻子をどうするつもりか。』

S『それを天香さんにきいて叱かられた。成程聞いて見れば借りをはたすに妻子の事を思ふては誠が足らぬ。あとは神樣任せと目をつぶることにした。』

債權者は此意外な眞劍なはなしに、殊の外動かされた。

債權者『なるほど……。分つた。自分は滿足する。君の誠はよくわかつた。もう自分の債權については君の心をいためまい。どうかきばつてやつてくれ。若しか必要な事でもあれば、少し位なら云ふてきたまへ、又用立てゝもよい。』

との事であつたそうである。Sさんは非常に驚いた。『こんな分つた人とは知らなんだ』と。至誠がそこまで出る時に何れの人も響きあふが、玆迄の至誠！、今の商業道德の上にはあらわれぬ。

爾來Sさんはあざやかに新生涯に立たれてゐる。何を見てもうれしい。何をしても力がある。徹する。おびへぬ。今は、非常な決心で托鉢を或商家のうちにやつて居られる。妻子々々と心配された妻子の方は、今遠からぬ町の托鉢先きの持家に、樂に奉仕をしてゐられる。人の心は機微の間に善に歸るものである。客はSさんのこの事をよく知つてゐられる。けれどもさて自分を處するには、一切了底に決心もつかぬ。再會を約して別れた。

エレベーターで五階を下りながら、何處にも問題だらけであると感じた。その客人とSさんの二人を玄關に見送りながら、自分は地下室の惠まれたる小室に歸つた。（大正十五年六月廿六日）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

天香師への巡禮

K 生

「何萬里遠方にきらめく星の運行を、幾萬年の後までも精確に計算し出す天文學者の頭腦が、どんなに確なものだか今更いふまでもないでせう。けれど此の地上に、天文學者の頭腦にもまして更に確なものが一つあります。それは古今の聖人方の歩みです」と、ある天文學好きの友人が話したことがありますが、自分は此の說には、無條件で賛成したい氣持を魂しひの中心に感じます。棄恩入無爲の本物の出家たる聖人が、古來忝くも人間の世界に跡を遺した一足一足の歩みは、地上の何ものゝ權威を以てしても犯すことのできぬ絕對なものだと思ひます。此の聖人の確な歩みによつて、世界の崩壞は防がれてゐるのだともいへます。若し眞の出家たる聖人の祈りがないならば、古來英雄天才によつて成し遂げられた大發明大發見も、政治上學術上の偉大なる事業も、徒に世界の混亂を增し、世界をしていつまでも賽の河原の石積みを繰り返さしめるに過ぎないでせう。此の聖人の祈りこそ一燈園の祈りです。Buddha's Nirvana, Christ's Passion 佛の覺り、キリストの慈悲とでもいひませうか、共にこれ聖者の祈り——其處に世界は自らの究極の依り處を見出してゐるのではないか。自分は先づ最初に何をおいても、聖人の眞實の智惠と愛の源なる三昧力といふものによつて、心と身と生活を調へる

必要がありました。凡そ世界の調和とか活動とか進歩とか創造とか成就とか、是等一切の美はしく尊きことは、皆此の三昧力に支持されてゐる、これなければ一切は空無なり無駄なりと自分は觀じました。斯くの如くして棄恩入無爲の眞の出家たるもろ〳〵の聖人達を禮拜し、そのかぐはしい御足の跡を慕ふのは、自分にとつて極めて自然のことであります。自分は現在、師を眞の出家として禮拜してゐます。自分が今までに接した有名無名の人士中、その學識に於て手腕に於て道德に於て優れた人物は尠からずあるけれど、眞の出家、最も深く魂しひの奥底に觸れる道の體現者といふ點に至れば、今までのところ師以上の人を見出し得ませんでした。自分は此の末世にあつて、一人の眞の出家を師に於て見出し得たことを、無上の悅びと感じて居ります。すべて問題の根本的解決は、ひとり師によつてのみ可能であるとさへ感じて居ます。然しこれは初めからそうではなかつたのです。師に對する信が此處に至るまでには、可成りの代價が支拂はれました。今、師に對する心の推移を省ることによつて、園生活に於ける魂しひの辿りを知らうとすることは、生涯を此の生活に捧げようと決心してゐる自分にとつて、涙ぐましい程の試みであります。

自分が始めて師の謦咳に接した時は、その現代に稀有な行持をまのあたり拜して、すつかり魅せられてしまひました。師は我々弟子達と生活を同じうし乍らそれ以上のことをなさるのです。朝は早くから起きて皆と一緒に靜座や勤行をされます。夜は衆に遅れて臥床に入られます。いつも粗末な木綿の筒袖を纏ひ、御飯は麥と少量の漬物を拜んで頂かれます。そして腹がふくれると便所を淨めたり、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

跣足になつて草ひきや溝さらひをされます。毎日缺かさず町へ托鉢に出られ、汽車は必ず三等にきまつてゐて、大衆と苦しみを共にされます。しかも刑事までが尾行してゐて呉れるのです。優しいおちついた物腰の中に、革命家らしい清新な生々した氣持よさがありました。太いかすれた聲は腹の底から流れ出て、對者をぼうつと春霞の中に包んでしまひます。然も革命的な鋭い言葉は一々若い魂しひの金的を射ずにはおきません。黒く日に燒けた、勞働者のような顔の中から、眼光が鋭く人の心の裏までも射通します。それでゐて對座すると、春風のような柔かな雰圍氣が漂ひます。何物でも攝取せずにはおかぬといふ大きさが感ぜられました。

自分は托鉢先で夕方など淋しくなつて來ると、心細さや仕事のいやさで、もう托鉢などやめてうちへ歸らうかといふ思ひが、むら〳〵と湧いて來ることがありました。そんな時に突然師の丈高い姿が、來迎の菩薩のように入口に現はれて、日に燒けた御顔をにこ〳〵させ乍ら、庭など掃いてゐる自分の側へやつて來て

「どうです、えらいことはありませんか、見かけの割に御丈夫ですね」などと優しい言葉をかけて下さる。その笑顔を見、御聲を耳にすると、今までの淋しさや心細さは雲霧のように消えて、すがすがしい晴れやかな氣持が蘇り、新しい勇氣が湧いて來ます。自分は何といふことなくいゝ氣持で、何も分らない子供のように、師の大きな胸の中に抱かれ乍ら、毎日愉快に働きました。無論、師の言行には何等の矛盾も感ぜず、不審も抱きませんでした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

「懺悔の生活」といふ書物が出版された頃から、師の言行は漸次複雑の度を増し、不審を抱かせる事件が多くなつて來ました。ほんとは今迄だつてそうであつたのかも知れないが――若い純な感激し易い心がそれを蔽ひ隱して居たのかも知れないが――其頃になつて殊に凡人の了解しかねる言行が繁くなつて來たように思へました。園を訪れる求道者の數がふえるに隨つて、師は日増しに氣短かになり、人に接する態度に慇懃さが失はれて行くように見えました。何といふ高慢な人だ、懺悔だの下座だのと聞いてあきれる。少し思ひあがつてゐるのではないかと疑つたりしました。本來高ぶつた人なんだ。下座々々と高唱するのは現代社會に對する警告といふよりは、寧ろ自分自身の箸にも棒にもかゝらぬ優越慾に對する對症療法なんだらうと疑ひもしました。若い氣の弱そうな來客などあると、いゝ加減にあしらつてゐるように見えて、ハラ〳〵したこともあるので、時に優しい丁寧な應待を見ると、ほつと安心して胸を撫で下したものです。嬉しくて感謝したい氣持ちになつたことさへあります。

「近頃は一燈園も有名になつたので、うつかりすると浮足になる恐れがある。」

そういふ師の言葉をきくと、本氣でいつてゐるのかしらと思ひました。

「要するに商賣人にすぎないんだ。生れを見給へ、長濱ではないか。あの猶太人のような下素な商賣人根性………」

こんな恐ろしい暴言を吐いた人もあります。

其頃は師に對して半信半疑の態度を持する人が殊に多かつたように思へました。よるとさわると師

の人格が噂され、誠實が問題になりました。師の名聲嘖々として天下を風靡するとき、圜の裡では純な命がけな求道者にして、師に心惹かれることを感じ乍ら純粋に信じきれず、苦しい胸を抱き乍ら泣いて祈る同人も一人ならず居ました。

ある晩春の夕方、AとHといふ二人の女性と一室に會したことがあります。Aは孔雀の誇りと月見草の淋しさを一身に具へた魅力ある女性でした。Hに至つては、この表現が許されるならば、女には珍らしい眞實の探求者でした。自分は其時、悲しい事實だけれど如何に苦心しても師を信ずることはできないといふ氣持を縷々述べました。其以前にも、師と一緒に暮して居たAから、屢々師の言行に對する疑問を聞かされてゐたし、其他でも師に對する好ましくないたよりを少からず耳にしてゐました。もう其頃は師に接しても、以前のようにおつとりとおちついた、ひろ〳〵とした印象はうけとれなかつたので、つひ不快な身構へをすることさへ度々ありました。

自分が二人の女性に向つて、師に對する悲しい疑念を告白したとき、Hは暗い表情をし乍ら眉一つ動かさず聞いてゐたが、私が話し終つて暇をして外へ出ると、急に呼び止めました。

「〇〇さん」と窓の格子につかまり乍ら、血相を變へて恐ろしいけんまくで叫びました。

「〇〇さん今の先生に關する御言葉は、あれはあなたのほんとの御氣持ですか。噓でせう、あんなことをいうて見たかつたのでせう。どうか取り消して下さい、今すぐ取り消して下さい。あゝ苦しい。私は堪えられない。私は永久に先生を如來の白毫の中に見るのだ。さあ早く取り消して……私は

もうとても堪えられない………。」

そういつてHはわあつとばかり疊の上に泣き伏してしまひました。母に泣かれた子供のように、Aも一緒に泣き出しました。自分は窓の外に佇んだまゝ、暫しあつけにとられて見てゐたが、やゝあつて思ひきつて、

「餘計なことをいうて濟みませんでした。取り消せといふのなら取り消します。」といひ放つて其のまゝ歸りました。然し言葉は取り消しても氣持は取り消せません。取り消せと迫つたHも、一緒に泣いたAも、其後師に對する疑ひはつのるばかり、殊にHは、師を信ぜんとする意志と、拂つても〳〵拂ひきれない疑惑の影の間にはさまつて、長い苦しみをしぬきました。自分とて同じことです。今度こそは師のもとを立ち去らうかといふ暗雲が常に心の一角にたゞよつてゐました。たゞ此の生活に對する動かぬ信念の故に躊躇してゐました。自分は師と此の生活とを別々に考へるような傾向になつて來ました。師には無關心に、此の生活を深く掘り下げようといふ氣持にさへなつて來ました。

そのうち、九天に迄高められた師の名聲が、無殘にも地に叩きつけられる時が來ました。つひ先頃まであんなにも師をかつぎあげてゐた新聞や雜誌が、一つ二つの人聞きのよくない事件の故に、にわかに態度を變へて、師に向つて非難攻擊の筆を揃へ、一齊射擊を開始しました。僞善者、にせ聖者、山師、喰はせ者、女たらし――あらゆる極度の中傷讒誣の矢が一齊に師に向つて放たれました。驚いたのは、そうした恐ろしい、針でつゝくような惡口雜言の眞唯中に座つて、兎の毛ほども心の平和を

亂された様子もなく、非難の聲がつのればつのるほど益々悠然とおちつき拂ふ師の態度です。

何處を風が吹くといつたような、その惡口については何事も知らないかのような、てんで問題にしてゐないのです。師を賞讃する聲が高くなると、可成り問題にされるかの如く見えるのに、非難の聲に對してはよくもあゝ無頓着で居れるものだと不思議に思ひました。それでも誰かゞそのことについて何かいふと、師はつゝましく顏を曇らせて、「私の不德のために世間を御騷がせ申して濟まないことです」と詫びられました。そしてまたせつせと仕事に忙しそうでした。

自分は漸次、師の一々の言行などはあまり中心の問題とは感じなくなつて來ました。汽車に乘る時先を爭ふ人を一般に是認する氣にはなれません。けれど、他人の後から徐ろに乘るのを常とする師が、偶々一度、少し先を爭ふように見えたからとて、その一事をもつて師の人格を疑ふ譯には行かなくなりました。今まではあまり枝葉の言行にしがみついて苦しんでゐたように思へる。行解相應といふことがありますが、人である師に行の上で聊かあきたらぬ點があつたとしても、むきになつて責めるのは愚なことだと氣附きました。自分達にはまだ分らないのかも知れない。だから不審は不審として遜つて御尋ねすることゝして、先づ師の透徹した解を拜むに如かずと決心しました。すると今まで師に對して半信半疑の靄の中に迷つてゐた時も、なほ疑ひきれない物を感じてゐたのが、その或る物を益々強く感ずるようになりました。それは一體何であらうか。自分は明かに見究めようと思つて種々苦心して見ました。けれど知識をもつて反省して、その姿を心に思ひ浮べようと試みても、遂に捉

へ處のないものでした。それはからつとした何もないようなものです。それでゐて力強くひし〳〵と迫つて來ます。自分を捉へて離しません。

その時自分は、かつてある夜友人と公園を散歩した時のことを想ひ起しました。自分達二人は並んで、靜かな仄暗い小徑を歩いてゐました。談は偶々生死の問題から芭蕉の臨終に移つて行きました。その時友は嚴肅な語調で語りました。

『芭蕉の臨終もはや四五日に迫つた或る日、枕邊に看護る弟子達から、辭世の句をといつて求められた時、苦しい息の下から語つたあの有名な言葉――君は知つてゐるだらう。自分が生涯云ひ捨てた句々、一句として辭世でないものはない。きのふの發句は今日の辭世、今日の發句はあすの辭世だといふのだ。何といふ莊嚴な、すが〳〵しい芭蕉の心境であらう。僕は時々、絞首臺に追ひやられる死刑囚の心裡を想ふて、冷水を浴びたようにぞつとすることがあるが、僕等の運命も彼の死刑囚達に較べて、どれだけ違つてゐるといへよう。一日の苦勞は一日にて足れりともいふが、願はくは念々死に直面する自分を省ることによつて、僅に惠まれた生の一歩一歩を、淨め深め絕對化して行きたいものだ』。

それから二人の間に少時の沈默が續きました。仄暗い瓦斯燈に照された砂利の小徑を、數分間二人は默つて歩きました。此の數分は自分にとつて生涯忘れることのできない數分です。何と形容しようもない、强いていへば凉しいといはうか、又何もないような、然し充ち溢れてゐるようなものでありました。二人は一つの意識の中に融け合つてゐました。二人が一つの世界でした。暫くして自分は

あゝと大きな吐息をすると、友も同じように應じました。すばらしかつたねといふと、友は又同じように應じました。二人が全く同じ世界に一つになりきつてゐたことを、友も自分も同時に感じたのです。

自分は其の時のような完全な靈妙な經驗を、其後まだ一度も繰り返して居りません。けれど其時から何物か光につけるものが殘つてゐて、自分の性格に可成り深い根を下す、憂鬱や倦怠の荒野にさ迷ひうろついてゐる自分に、暗の中から一條の白道を示し、尊き師の世界へ導いて呉れることを感じます。師が好んで筆にされる倶會一處とか、無一物中無盡藏とかいふ神聖な言葉——あまりにも簡單に、頭腦だけで理解されてしまふ此の神聖な言葉を、兩手でぐつと握りしめ、兩足でぐつと踏みしめたように感じます。その時始めて師を見ました。師こそ末世に稀有な、眞實棄恩入無爲の出家であることをはつきり見ました。かつて古人にのみ見た眞の出家を、今目前に拜し得る自分の幸福を、繰り返し感謝しない譯に行きません。これは魂しひの進歩だと思ひます。自分は生活に希望を感じます。自分の生活はこれからぽつ〳〵始まりかけるのを感じます。

（大正一五・六・二一）

家郷一日の遊歩

松下吉衛

×月××日　水曜

目があいたのわ六時ちかく。皆さんの掃除におくればせながら加わる。

朝食の御供養おうけて、すぐ『愛の家』から出掛ける。途中、奉仕先のKさんとEさんお訪ずれてU驛に向う。歸省せんためだ。五歳になる三男の好きな。はつぱパン（ジァム入りのパンお形が木の葉に似ているので、彼わこう命名している。）お、U山下のNパン店で買っておみやげにする。

十時廿分發の汽車に便乘、すぐ原稿かきにかかる。××××から頼まれた分お、今月わどうしても差上げねば、あまり不義理になるので、出來るなら、今日の三時間の乘車中にまとめたいと思う。

書くことがないわけでわないのだが、いざ筆おとる段になると、遅筆と文章のまずさに、いつもまいつてしまう。ちよつとした感想お綴るのに、三時間もかゝつて、せい〳〵四五枚しか書けないでわ、全く情ない。それも、讀み直すと、いくらでもあらが目につくので、醜い自分の姿お、未知の人の前にまでさらげ出すようで、堪えられない氣持もするが、また、このまゝお、よいもわるいもありのまゝお、皆さんに

見ていたゞいて、『こゝにこうしている一存在（ワンビーイング）があります。』と、かざらず、かたくならず、あくまですなおに、すつかりまかせきつた心で、申出でたい願お持つている。この願わ、可なり根強いらしい。私のようなものに、筆がとれるのわ、この願の故であろう。

K驛あたりから、顔お見知つた若者に、いろいろ話しかけられ、××××えの原稿、またしても、とう〳〵、まとまらずじまいになる。

午後一時、郷里のT驛着。

關係の懷爐灰會社に、ちよつと立寄り、支配人にあつて、此度始めようとする煉炭の事業計畫おきく。

實家に着いたら、丁度、はあちやん（尋常二年）と、たあちやん（幼稚園）とが歸つていて、私が下駄おぬくなり、『とうちやんおかえり！』『とうちやんおかえんなさい。』と寄つてたかつて、すぐ『お馬になつてよ。』とせがんで私お四つんばいにしてしまう。二人してまたがるや『はい〳〵、どう〳〵』『あしがら山の山おくで』お歌つてわ、お馬が歩みを止めると、おしりおはたく。

母が『とうちやんわね、東京から汽車にのつてきて、くたびれているのだから……』といつても、きかばこそ。それでも『とうちやん、くたびれてる？いない？』『大丈夫？大丈夫？』と、姉弟こもごもたずねるので、『うん〳〵』お馬が答えれば、また元氣な聲で唱歌が始められる。耳おひつぱられるまゝに、お馬わ座敷中お右し左ししている中に、少しかけ出すと、騎手達わ、わざところげおちてわ、『きやつ〳〵』といつて大悦びする。また、とびのる、また、ころげる。『此度わねいちやんが前さ。』と女騎手が要求しても、荒騎手のたあちやん、なか〳〵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『うん』といわない。やがて『たあちやん、つまんねやあ。』とくる。そこで、女騎手、姉のやさしさで折れて出る。『じや、このつぎ。ねえ、いゝだろう。』で忽ち媾和成立。お馬わまた一としきり、はいどうどう、はいどうどう。

　二人の騎手に乗られてわ、そうかるかない。やがて、お馬わ満身に汗した。『お馬わくたびれちあつた。』とつぶやけば、騎女手『かあいそ〱』といつておりる。『とうちやん、また、ごはんいたゞいたら、お馬になつて、ね。』これわ荒騎手の、いとも殘りおしげな聲。とうちやんお馬たるもの『うん〱』お連發して快諾の意お表せずにいられようか。

　妻から留守中の用件おきく。

　今年わ水がれが極端で、××の田地わ苗代おしつける見込みがないとわ困つたものだ。どうゆうわけか今年私のようなものお水利委員に選んできたそうなので、とりあえず、二十町ほどある××に出掛けて、××氏お訪ずれ、いろいろ模様お承わる。つれ立つて、N川筋からK山の麓ちかくにある泉のあたりお見まわるのに、つい去年まで盛んに流れていて、所によると恐ろしいまでに青々と湛えた深淵のあつたN川の河床が、すつかりひあがつているのにわ、雨がいかに少ない年とわいえ、何か他に原因がなければならない。水源地が薪炭の産地でありまた電柱用材の伐採おつずけているので山がはだかになつた爲めでわあるまいか。それともあの大地震で水脈に異變でも來したものか。何にしても此邊の農民地主にとつての大問題だ。

　『此度の水利委員わどうゆう顔ぶれですか。今日、實わ、東京からもどつて自分の選ばれたのお知つたようなわけで。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『作人側で故意に地主ばつかり選擧したとしか思われねえんです。ちよつと、變てこなんでして。』
『なるほど。』
『此頃どうも作人と地主との關係がおもしろくねえんです。おかげさんと、まだはげしい小作爭議なんてえことわありやんせんが。……一體わしら地主として、どうしたらいゝんでしよう。』
『容易ならない問題ですが、覺悟次第によつてわ、解決の道がないでわないでしよう。不勞所得に食んで他おそこなつている事實があるなら、生活お根本からかえねばならないと思います。』
『そうしやんすと、小作米わどうゆうことになりやんす。小作米おもらうことわ、えけねいこゆう御意見なんですか。』

『そうでわないのです。作人方にたゞ無條件に小作米おまけてあげることが常によい結果おもたらすとわ信ぜられません。作人方にもやはり生活お革めて鬪爭本位權利思想中心でなくなつてもらわなければ、少し位みいりが增えたからといつて、それで決して仕合せになるものでわありますまいから。』
『あんたのことお社會主義かと思つてました。今のお話じあ、そうでねいようですね。……つまり、わつしらわ、どうゆうくらし方おしたらいゝとお考えですか。』
『やはり、御自身百姓おなさるのが、一番自然でわないのですか、土地おもつていなさいますし。小作米や何かの收入によらないでやつて行ける程度に耕作して、つゝましやかにおくらしになつて、餘財わ財團法人お設けてそれに寄附なさつたら。……それから小作料ですが、これ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

わ作人方が百姓として立つて行かれる點お標準にして加減する外ありますまい。こうなると、形式わ依然として地主でも、實際わ土地の管理人にすぎないことになつて、作人方の恨の的からもはずれておれば、自分の良心にきいてもはじわしません。土地が、よしんば、無償で公有に移されようが、資本の私有が廢止にならうが、こうした生活にさえ基礎おすえておれば大磐石です。』

『それわそうゆう道理にちげいねいんですがな。いざ實行となると、なか／＼初めの一歩がふみだせねいもんでして……。財團法人つてごんなことお事業としたら、こゝとしちや適當でしよう。』

『私わ、じみな考のようですが、教育事業だと思いますね。一人でも多く「人」らしい「人」に出てもらうことが何より大事でわないでしようか。別段、英雄豪傑わいりわしない、人らしい人がほんとうに少ないのですから、そうゆう人にこれからの子供等お養成する學塾が必要じやありますまいか。』

『あんたのところでやつてる幼稚園わ今のお考から始めたんでやんすね。』

『えゝ。でも、まだ／＼内容が充實してません。大體此頃私わ東京の方なものですから、思いながらかまうことが出來ませんでして……』

『いや、結構です。皆さんどのくれい助かりやすか。……お隣りのT村の託兒所えも近頃お手傳なそうですな。』

『なあに、たゞ保姆さんに一人いつてもらつたゞけなのです。………こおつと、この次ぎ歸りましたら、またおうかゞいしますから、……これじあ全く仕方がありません、井戸お掘るとか、泉にポンプおしかけるとかしなければなり

ますまいから、どうぞ他の委員さん方によろしく。大變御厄介かけました。』
『とんでもねい。わざ〳〵御苦勞でした。じあ左樣なら。』
××氏わこの字での地主の筆頭、よく事理お辨えた、こうした立場の人にわ珍しい進歩的思想の持主なのである。

夜、愛正會事務所で、Kさん、Sさん、O町からのWさん、A市からのTさんと寄りあい、每月朔日の黎明講演おT町O町A市で勵行すること、T町に學塾開設の準備にいよ〳〵とりかかること、機關紙『黎明』繼續のこと、青年日記念圖書館充實のこと等協議する。
どうも此頃愛正會の運動に生氣が欠けて來たのわ否めない事實だ。TさんがT市の學校に轉任になつたことも、その有力な原因に相違ないが、何よりも私の及び腰なのがよくないのだ。東京の方の仕事お、も少し整理してと思うが、それがなか〳〵出來にくい事情にある。せめて連續講演だけなりと來月といわず今月から始めるようにしよう。他お責めることわない、自分が足らないのだ。他に賴るのが間違いなのだ、自分でやる外ないのだ。
一人、結局一人ぼつちか。いのつてやまなければ、石も叫ぼうが、何だか今夜わ久しぶりに鄕里の許しあつた同志とあいながら、いゝしれぬ寂しさお感せしめられ、どうしようもない。

十時歸宅。中學二年にいつている長男が、私の歸りお待つていた。代數、英語、漢文、國語等の質疑に答える。長男わ、いつもこうして質疑おためておいてわ、私にきゝ〳〵する。勉强すきなので級の首席なそうだが、自負心からつ

まらぬ競爭などしてくれぬよう、今夜も懇々たのむ。妻もそばから

『兄ちやんわ少し机の前にいすぎますよ。體でも惡くしたらそれこそ大變。あなたとでもなければ、しみ〴〵誰とも話さないんですもの。少し此頃厭人してるようじあないの。』

『そうかい、兄ちやん。』と私が笑いながらいえば、彼わ、私のなどよりわたくましげに見える兩腕お机の上に組んだまゝ、たゞにこ〳〵して私等の方お見ながら默つている。

今から十餘年前私が新生涯に立たせてもらつた時、彼だけわつれて——當時まだ五歳だつた——京都のあの鹿ケ谷の道場で底冷えのする冬お越し、手おきるような筧の水で顏も洗わせ、地下室の食堂でたべなれない麥飯もたべさせたものだ。子お思ふ親心に甲乙わなく、親子の情に二つあるはずわないが、彼とわそうした味お一所になめて來ているだけに、私がいないと、ものさびしいのであろうか。大震災の時などでも、在京していた私の消息がしばらく不明だつたので、その間ろく〳〵彼わ食事おとらなかつたとゆう。

こんなふうで彼わ私のゆうことお實によく守つてくれる。まだ〳〵わからぬことだらけで、いのりの形にしても間違つてばかりおる私だが、子供のことわ、少くとも自分よりわよりよくし、自分のふみあやまつたあやまちだけわくりかえさせたくないものと常々念願している。この念願の故からだけでも、私わ精進おつずけていかねばならぬ責任を感ずる。

われよりわすぐれしものになれかしと
いのるわおやのこゝろなりけり

『學校で上級生が野球部にはいれつていつてすゝめるんだけれど……』

長男わ小學時代から投球およくし、カーヴも出れば相當コントロールもきくとかで、年不相應に發育した彼が投手として立つと、勝利わいつも彼の組に歸するのだ。

『さあ、野球部員になつてしまうことわ考えものだね。體にも反つてよくないか知れないよ。運動わ、しかし、毎日しないといけない。』

十一時打つたので皆就床。ふと『働く者の家』の宿泊者方の上お想ひ、こうして省る家鄕のある自分お、しみ〴〵勿體ないと感じた。

○本號表紙題字は奈良東大寺國分門懸額（國寶）の『金光明四天王護國之寺』の中からいたゞきました。

黑谷上人起請文

もろこし我朝もろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、また學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず、たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば、うたがひなく往生するぞと思とりて申外にわ別の仔細候はず、但三心四修なむど申す事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふ内にこもりて候なり。このほかにおくふかきことを存せば二尊の御あはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜむ人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念佛すべし。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

人間といふもの

八田かつ三

◇かくあれかしと思ふ心から、人間といふものの本來の相を、あるべき位置に見ずして、一方向きに且つ神に近く扱ひすぎて居た事が、此頃になつて漸く分りかけたやうな氣がする。勿論今までとても全然分らないのでなく、漠然とは認め乍らも、そう思ひたくない心が、長い間ベールをかけて人間を見させて居たのぢやないかと思はれる。然しその結果は他人からは幻滅の悲哀を時に味はせられ、自分自身も、人間性の一部分を切りとつて了つたやうな、人間ならざる者を標準として、それに成りきらうと無理に努めてゐたやうな事に陷つてゐたに違ひない。斯う思ひ出して、新らしい角度から、改めて人生を見直してみると、視野は急に廣くなつた。すべての人々が一層なつかしく、責める氣持や、審く心は本當に持てやしないと、今更らのやうにつく／＼思はれる。人を人として眺め得るやうになつたことは、私にとつて此頃の大きな收穫である。

◇一般的には肯定しない事柄に對しても、自己の生活内容を是認しやうと思つてゐる時には、あらゆる引證を設けて、先づ自分に云ひ聞かせ、次に他人にも尤もらしく承認させやうとする場合がある。それは何事に對しても隨分明快な理智力を有する人にでも、屢々見受けられる。

◇正直に云へば一言ですむことを、露はに自分の本心を知られることに氣を兼ねて、輪廓計りの説明で眞意を知つて貰ふとする狡さが、時々時間を浪費させる。

◇どんたくと招魂祭に、逝く春を遊び疲れて博多市中が歡樂の巷と化する翌日、幾萬かの荊冠旗は、宿醉の眼を驚かせて、全國水平社大會は開かれる。それに續いて天香さんのお話と政友會の田中總裁の博多入りとが同じ日にある。過

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

然とはいへ可成り皮肉な取合せだ。然もその日〳〵をそれ〳〵の興味を以てみてゆけるとは、人間性は面白い。

◇弟が惡いから直ぐ歸れとの電報を受取りはしたもの丶、講演の先發で來て居て、天香さんが明日いらつしやるのに、人情に墮つることは理智が許さず、準備も一段落した儘、折柄のどんたくに華やかな人通りを眺め乍ら、店先きで光の原稿を書き始めた。

◇目眩しい流轉の裡に靜觀すべく與へられた好い機會である。過ぐる震災の際、丁度北海道へその時も矢張り先發で行つて居て、生憎東京を留守にしてゐた爲、又とない體驗を味ひ損ねた私は、此度は旅によつて醸された試みに人生を敎へられる。流るゝ儘に環境に反抗せず、又執しもせぬ自己をだん〳〵に創造したいものである。

◇どんたくの後からは、きつと二三十人の見物がぞろ〳〵ついて歩いてゐる。人間は大概あの見物のやうに、自分自身にははつきりとした目的も持たず、美くしそうなものに眩惑されて、暫らくはそれを追ひ又新らしいものに誘はれて一生を送つて了ふのぢやなからうか？　時に皆をあつと云はせるやうな趣向をこらして大向ふをうならせた所で、當座の口の端にのぼる位のもの。永遠性はそうした生活の斷片からでも、生命の成長に役立つ何物かを摑み出す者だけに與へられる。

◇理論上肯定出來ることも、實生活に取り入れて得る度合は、その人〳〵の器量によつて何れも多少は違ふ筈である。それを忘れて了つて如何に共鳴する所があつても、人の言動を直ちに其儘眞似ることは危ないことである。同時に自分には無理だからとて、人の行履を非なりとみるは偏見かも知れない。これは智識階級の人々にとつて、特に考へておく必要のあることである。

—大正一五、四、三〇博多にて—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

石原等さんの御靈え

―等行居士一周忌菩提の爲に―

すゞき五ろう

石原さん。等さん。
こう呼びかけると
あなたの　あくまで謙遜な
優しい眼をした　圓顏が
ありし日の　そのまゝに
浮んで來ます。
　あなたと　私と
一番御縁の深かつたのは
大震災直後　一燈園の兄姉達が
震災救護の托鉢に
大擧して　上京した時に、
あなたが　龜井さんと御一緒に
日比谷公園の「憩いの宿」に托鉢して
木立の間に　十幾張のテントを張つて、
もうそろそろ　秋も深く
霜も降り様としていた頃に
宿もなく　野宿をしていた
自由勞働者の　方々や、
狂暴な嵐に　吹き散らされる
枯葉の様に　寄る邊も無く
逃げ迷うていた　朝鮮人の方々やを
二百三十人も　收容して
病氣のことから　就職の御世話まで
していて下さつた頃でした。
「憩いの宿」では　晝間は
病人の他は　みんな勞働に出かけて
寂然(ひつそり)としてをりました、
鈍い晩秋の陽に照らされて
彼處此處に　立つた
カーキー色の　ピラミットテントの裾が
物思はし氣に地に垂れて
落葉が　ハラ／＼と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

絶えず散りかゝつてをりました、
何となく　牧草を追うて漂泊していた
原始時代の生活が思はれました、
餘りな生活狀態の激變と　過勞と
非衛生と　精神的打擊との爲に
隨分多くの人々が　倒れました、
何のテントにも　窺いて見ると
隅の處に　粗末な骨壷と位牌が
御祭りしてあつたりしました、
それが皆　明日（あす）をも知れない
自分達の姿でありました。
　その間に立つて
あなたが　アメリカから寄贈の
水色のセーラーシヤツを着て
陸軍からお下りの　ズボンを穿いて、
心持ち首をかしげながら
何時も　ニコ〳〵と
病人の看護やら　御炊事やらを
一手に引受けて仕ていて下さつた
姿が今でも眼に浮ぶ樣です。

　震災直後から　翌年の春まで丸半歲を、
あなたは　この天變の爲に最も苦しんだ
人々を　御世話して
一緒に　苦しんであげて下さつたのです。
　あなたが　御病氣になつたと
云うことを　聞いた時に
私は思はずハツとしました、
私は　あなたの病氣の因（もと）は
あなたの　寛大な忍從に甘えて
餘りの無理を　御願ひした
私の　不行屆の罪にあると
直覺しました。
　あの當時　淺草公園には　松井さんに
芝公園には　夏井さんに　御願いして
日比谷公園と　同じ樣な
テント張りの　無料宿泊所を
同人の手で　やつて頂いてました、
そして　私は
賀川さんの本所キリスト教產業青年會に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

置いて頂いて　そのテントや
床板や　毛布やを調達する爲に
飛び廻つてをりました、
濟まぬ濟まぬと　思ひながら
一番辛い役を　あなた方にばかり
御願ひしてをりました、
そして翌年の一月下旬　御成婚の前の日に
市から配給された　布團を
三ケ所の宿泊所へ　配り終ると同時に
私も　名も分らぬ熱の爲に
二ケ月を　病床に倒れて仕舞つて、
飛鳥山の櫻が　焦土を眼の下に
綻び初めた頃
一足御先え　京都え歸らせて頂きました。
　その間に　あなた方は
寒氣と　物資の缺乏と
そして　だん〳〵一時の緊張がゆるんで
自暴自棄になつて行く　人心との爲に
どんなに　苦しんで下さつた事でしょう、

私は　自分の病氣の爲に
あなた方を　忘れたのではありませんが
力の弱い私には
秘かに　拜んでいるより外に
致し樣もありませんでした、
あの當時は　凡ての方面に
あまりの無理が　行はれていました、
眼の前に　それを見せつけられていた
私達は　無理だと知りながら
それを續けずには居られませんでした、
そして　あなたは　その犧牲に
なつて下さつたのです。

　石原さん。等さん。
あなたの　御臨終は
穩かに　聖らかであつたと聞きました、
恐らく　あなたは
いつもの樣に　優しく微笑んだまゝ
昇天なさつたのでしょう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

あなたは　立派に愛の使徒として
天國え　凱旋されました、
あなたの　二十八年の生涯は
短い様でありますが
あなたは　自らを
不滅なるもの〻　榮光をもつて
飾られました。

Ｋさんが　此間私に
「どうか　この生活をしている内に　死にたい。」と
悲痛な面持で　云はれました、
私も　深くそれを思ひます。

あなたは　立派にあなたの一生を
仕遂げなさいました、
この意味に於て　私は
あなたを　羨しく思ひます。
どうかして　私も亦
あなたに　倣うの光榮を
持ちたいと願ひます。

あなたは今　凡てを赦して
静かに　微笑んでいて下さいます、
歸眞された　あなたは
無礙自在身を得て　常に私共の側に居て
守護していて下さいます、
このことを　私は
心から　信じます。

死は　あなたにとつて
完成でありました、
死は　あなたにとつて
不滅なるものえの　飛躍でありました。
榮光　あなたの上にあらんことを。

＊　＊　＊　＊　＊

武藏野道場より

山口源吾

麥の秋を過ぎて、今むさし野は、よろづ青からぬはなき鄕であります。

からつゆにおはろうとした雨期が、一よさの惠みに降れば、野川の水もかさんで、水田の稲は、あの美しき和ぎを加へます。

なす、胡瓜、夏大根、馬鈴薯、いんげんなど、季の畠のものは、手不足な同人の手をまたずも、こゝ地よく潤ふた地に、すこやかに育ち、光友托鉢先樣方に、おわかち出來る程であります。

日永一日を勞しきつて、道場へかへる野道は露しげく、蛙の聲は耳を聾せんばかりで、ふりかへる東京の夜空はあけに、街光は地平線上を、オーロラの樣に、染出して居ります。

地しづもれば、道場の夜は靜かに、時々隣りの牧場の牛の夜鳴きのこゑ、枕にとゞくばかりです。

こゝは、巷に出でゝ禱る方々の爲めに、善い安息所であり度く、ひたすら、後えから拜ませて頂いて居りますが、いたづらに、この地にこもることはせず、しかも、こんかぎりこの道場の、利用を禱つて止みません。

道場に於ての集りの日は、今のところ、毎月の第二日曜日になつて居ります。特に御通知はいたしませんでも、かならずその日には開かれるのでありますから、いづれ樣も、何卒御繰合せの上御來園を、お希ひ申上げて置きます。

次に、同人の動靜を附記させて頂けば、

●松下吉衞兄、いづれの日も、御多忙ならざるはないお祈りでござゐます。過日は、社會立法

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の基礎資料にもと、勞働者の爲めの「健康調査」を御創案なされ、それを「働く者の家」の、宿泊の方々に試みられました。未だその結果は、調査票整理中で拜承出來ませんが、またれることであります。●嵯峨德水兄、あいかはらず「働く者の家」の經營のことにあたつて居られます。

あの東京でも目ぬきの勞働街の一角に、吾等の宿禱のはたされて行くことに、おしみなく捧げて居られるのです。●谷田部信量兄、「働く者の家」中新井道場と、ほんめいに祈られた、かなりな御苦勞のお疲れが出でゝか、こゝ二ヶ月餘りふせつて居られます。あまりはかぐしくありませんが、一日も早い御全快を禱つて居ります。●菊地壽山兄、信州の山々をかへりみず、巷こひしく御出京あり、今「働く者の家」に居られます。●齊京守道兄、御國越路に歸られ、●水野谷三郎兄も因緣にまかせて再びお自家に還られそこからまことの道を產出さうと禱られて居られます。●大內三朗兄、今は、あきない荷身に負ふ商賣人となられましたが、かならずや新らしい示しを與えて下さるでせう。●高坂謙兄、療養所に御養生、だん〳〵およろしい由です。●古田眞以智兄も同所に托鉢奉仕されて居ります。●平松德一兄、過日帝大病院退院、現今成城塾に家庭ぐるみの御奉仕。●相賀靜江姉、竹原千代子姉「愛の家」に、御不幸な婦人方のお友達やら、可愛い童達の御仲間やら●野木春世姉、橋本節子姉、大槻はる子姉、新井節子姉、市內のそれ〳〵の御家庭の御手傳ひにあたられて居られます。おわりに、手前は近頃もつぱらむさしのゝ方を根じろに、居らせて頂いて居ります。何卒お禱添下さいます樣お願ひ申上ぐる次第でございます。合掌。

—七・一二—

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

高橋正雄先生著

道を求めて

四六版 天金上製函入

定價 壹圓八拾錢 送料拾八錢

篠山書房主人森本氏の懇請により、今回新しき裝ひもて世に產まれ出たものであります。森本氏も「本書の後に」の中に「實に一言一句全人格を打ち込んで、純粹創造へ進まれた先生。人の世に惱みある以上永遠に傳はる高橋正雄先生であります。それは本書を讀まれて其の有する偉大なる創造力―讀む者の胸にひし／＼と迫つて來て、讀む者をして先生の進まれて居る永遠の大道に進まずにおかしめない力―を讀んで戴かねばなりません」と述べてゐられる通り先生の深い體驗其の物から來る愛と力の響きは萬人の胸に尊きアルモノを投げつけずにはおかない事を堅く信じます。本書が一人でも多くの誌友に讀まれん事を心から祈る次第であります。

東京府巢鴨町宮下一六八八

發行所 篠山書房

振替東京三一七一三

信德舍

鎖夏避暑の好讀物

中外日報 三十年

八想録

八千號 記念出版

紙	○	物	道	女	家	人	血
石川日出鶴丸	西田天香	近重眞澄	荻原井泉水	高島米峰	梅原眞隆	曉烏敏	足利淨圓

◉體裁 各冊四六版八十頁以上 上質紙優美高雅裝幀

◉價格 毎一冊金五十錢・税四錢 全八冊金四圓・税十六錢

◆手輕な肩の凝らぬ讀物として

本書は想界唯一の宗教新聞であり、敎界唯一の思想新聞であるわが中外日報が、創刊三十年八千號の記念であります。記念出版といふことも餘りに月並的で鼻につくやうでありますが、本書の知き執筆の諸氏は、何れも現代の想界に、敎界に、はた學界に各獨自の天地を占有される一人者たるは言を要しません。しかも其内容に至つては、期せずして一致した奇抜なる題號と共に、奇聞、傳說、趣味、好事、さては肩の凝らぬ考證もの、思想批判、社會評論より、すつきりしたエロチックな話など、燦爛たる想華は天下一品の偉觀であります。

今や堅くるしい論說や研究には胸がつかへ、それとて玄人筋の文藝ものにも飽き〳〵してゐる時、本書の如き淡々として盡きざる興趣の裡に、スラスラと讀破し得て、しかも何物かを把握せしめねばおかぬものこそ、萬人向きの好讀物として推奬するものであります。

綠陰に、水邊に、旅窓に、隨時隨處に繙くべく、津々たる涼味に苦熱を忘れ得るであらう。

記念特價

本書は目下出版中にて八月中に全部完成の豫定でありますが、三十年八千號を記念する意味に於て、この際全部取揃前金申込に限り、全八冊にて金參圓八拾錢とし送料不要と致します。何卒陸續御申込みを切望致します。

發兌 中外日報社

發賣所 京都市東山 中外日報社内 中外出版株式會社 振替口座大阪 六四六一七番

「光」第五十五號 代價貳拾錢